

アルフレッド大王以前の古英語の一例 -ケンブリッジ大学蔵 MS. Kk. 5.16 の *Caedmon's Hymn*

小林 茂之

0. はじめに

ベーダ (Bede) による『英国民教会史』は9世紀末のアルフレッド大王のサークルによる古英語版がよく知られているが、ケンブリッジ大学蔵 MS. Kk. 5.16 はラテン語による原著 (*Historia ecclesiastica gentis anglorum*) で、ベーダの死後 (735年) から数年のうちに (738年頃) に書写された写本である。¹⁾ その最終ページには、初期古英語期のキリスト教詩人、カドモンの聖歌 (Caedmon's Hymn) が残されている。これは、ノーサンブリア方言の特徴を示し、アルフレッド大王版の中のウェセックス方言によるものとは一部の語句が異なっている。初期古英語の散文はウェセックス方言によるアルフレッド・サークルによるものである一方で、ベーダが前掲書において449年にアングロ・サクソン民族がブリテン島に招聘されたと述べている以前からサクソン人はブリテン島のサクソン海岸と呼ばれる南部の海岸地方に居留し始めていたという考古学・人類学的証拠が論じられている。²⁾

本稿では、二種類の古英語方言によるカドモンの聖歌を紹介する。これは、言語差に関する文献学的な知見について、近年の人類学・考古学との学際的研究の成果に基づいて古英語史を見直す必要性の例証である。こうした古英語のテキストには、キリスト教が英語の発達に果たした過程が反映されている。

1. ブリテン島と英語の歴史

5世紀ごろにアングロ・サクソン族が居留し始めた後のブリテン島では、アングロ・サクソン人はゲルマン系の異教を信じていた。³⁾ ローマの占領下の時代にキリスト教もブリテン島に布教されたはずであるが、初期のアングロ・サクソン文化では、火葬が行われていたことを示す遺物を大英

博物館の常設展示で見ることができる。その後、597年にアングロ・サクソン七王国の一つ、ケント国に聖オーガスティン (St Augustine) が教皇グレゴリウスに派遣されて、ローマン・カソリックによるキリスト教化が始まった。793年にデーン人 (the Danes, =ヴァイキング) の襲撃・略奪が始まる前、ブリテン島の文化の中心は南部ではなく、中部マーシア (Mercia) や北部ノーサンブリア (Northumbria) であった。リンディスファーン聖書 (Lindisfarne Gospels) で有名なリンディスファーン島の修道院はキリスト教の拠点であった。しかし、修道院はデーン人の襲撃を受けて、荒廃し、修道士は聖カスバート (St Cuthbert) の棺を担いでドラムに移った。

9世紀には、デーン人は中部のマーシアや北部のノーサンブリアを侵略し、南部のウェセックスだけが侵略を免れていた。ついにアルフレッド大王 (Alfred the Great) はデーン人を敗退させ、デーン人との間に和平を結び、ほぼテムズ川の北側にデーン法地域と呼ばれるデーン人の支配地が成立した。そこでは、アングロ・サクソン人とデーン人とが共存し、古英語は古ノルド語 (Old Norse) との言語接触を通して、中英語 (Middle English) への変化が促進されることになった。⁴⁾

ウェセックス王国では、アルフレッド大王の主導によって、荒廃したイングランドの文芸復興が行われた。この時に、アルフレッド大王と聖職者たちによって、アルフレッドが必要と考えたラテン語原典から古英語へ翻訳する事業が行われたことは、英語史上で重要な出来事であった。⁵⁾ この時点まで、古英語は韻文が伝わるだけで、はじめて古英語の散文が書かれるようになったのである。中部マーシアや北部ノーサンブリアでは、こうした地域方言で書かれた古英語散文が残されなかった一方、南部ウェセックス方言で書かれたアルフレッド大王のサークルによる散文が文献上に残さ

れたために、初期古英語の散文資料として用いられてきた。

その後、11世紀の後期古英語期に、有名な古英語の代表的な散文家アルフリッチ (Aefric) が『説教集』 (*Homilies*)、『古英語七書』 (*Old English Heptateuch*) などが残り、これらが古英語散文の事実上の標準として扱われてきた。しかし、アルフレッドの孫、アゼルスタン (Athelstan) によるイングランド統一を経て、古英語散文の発達は、初期古英語の散文が後期古英語の散文への直線的な変化ではなかったはずである。⁷⁾ 次節では、初期古英語期の北部ノーサンブリア方言の例として、ケンブリッジ大学蔵 MS. Kk. 5.16 のカドモンの聖歌の言語的特徴を見ることにする。

2. カドモンの聖歌

はじめに、ウェセックス版のカドモンの聖歌から見ることにする。以下は、Marsden (2008 : 80-1) による。⁸⁾

Nū sculon herigean heofonrices weard,
meotodes meahte ond his mōdgebanc,
weorc wuldorfæder , swā hē wundra gehwæs,
ēce Drihten, or onstealde.
Hē ærest sceōp eorðan bearnum
heofon tō hrōfe, hālig scyppend ;
Ðā middangeard monncynnes weard,
ēce Drihten, æfter tēode
firum foldan, frēa ælmihtig.

日本語による翻訳を高橋 (訳) (2008 : 237) から引用する。

今こそ天の国の庇護者や創造者の力やその配慮、さらに永遠の神があらゆる驚異をどのように創られたかを讃えるべし。神はまず地上の子のための屋根として天を創り、それから人類の保護者、全能なる支配者は人間のため

の土壌として地を創られた。

次に、MS. Kk. 5.16 のノーサンブリア版のカドモンの聖歌において、ノーサンブリア方言の特徴を見る。次は、写本に基づいた翻字 (transliteration) である。⁹⁾

Nū scylun hergan hefaenricaes uard,
metudæs maecti end his mōdgidanc,
uerc uuldurfadur, suē hē uundra gihuaes,
ēci Dryctin, or āstelidæ.
Hē aērist scōp aelda barnum
heben til hrōfe hāleg scepen ;
thā middungeard monncynnæs uard,
ēci Dryctin, æfter tīadae
firum foldu, frēa allmectig.⁹⁾

ノーサンブリア版の言語的特徴をごく簡単にあげる。音韻面では、*barum* (=child) に割れ (breaking) がみられない。¹⁰⁾ これは、ノーサンブリア方言の特徴である。¹¹⁾ 正書法 (orthography) の面では、<ae>と<æ>とが併用されていること、<p>ではなく、<th>が使用されていることである。また、アングロ・サクソンのアルファベットの<w>にはルーン文字のwynn<ƿ>が使われるのに対しては、<u>が使われている。なお、*heben* (=heaven) のは /v/ を表す。¹²⁾ 語彙面では、古ノルド語起源の*til* (=to) が使用されていることである。¹³⁾ *suē* (=so) は *swā* より古い語形である。¹⁴⁾

3. 古英語の発達と地域性

カドモンの聖歌に見るように、残されたテキストの時代差がそのまま発達の順序を反映しているわけではない。初期古英語における地域的な方言の違いは、地域ごとに居留することになったアングロ・サクソン民族がどのような大陸からの文化に影響されてかということに帰着される。つまり、ブリテン島がどのように外からの文化的影響を受

けてきたのかという動的な視点が古英語史を正しく理解していくためには必要である。

Oppenheimer (2007) では、古英語の発達について英語を含むゲルマン諸語が印欧比較言語学における従来の言語系統樹を見直すことを主張している。図1は、周辺のヨーロッパ諸語と古英語の発達についての相関性を表す。そして、図2は従来からの言語系統樹、図3は図1の研究に基づいて、新しく見直された言語系統樹である。図1は、語彙の共通性に基づく分析である。古英語のテキスト間の語彙の相違が少なからず存在し、中英語・近代英語への発達の道程は複雑な様相を呈している。また、図3は、英語が、ベーダが記した449年

のアングロ・サクソン民族の招聘以前から西ゲルマン語から分岐したことを示す。

図1においては、ウェセックス方言 (Alfred) とアンブリア方言 (*Beowulf*, マーシアとノーサンブリア方言との総称) との距離が離れている。前者から現代英語 (English) に直線的に発達したのではなく、Swedish, Danish などのスカンディナヴィア語寄りの古英語から発達したと分析されている。この意味で、ノーサンブリア版のカドモンの聖歌が残っていることは、初期古英語から後期古英語への発達の過程においてノーサンブリア方言の役割を見直す必要があると考えられる。

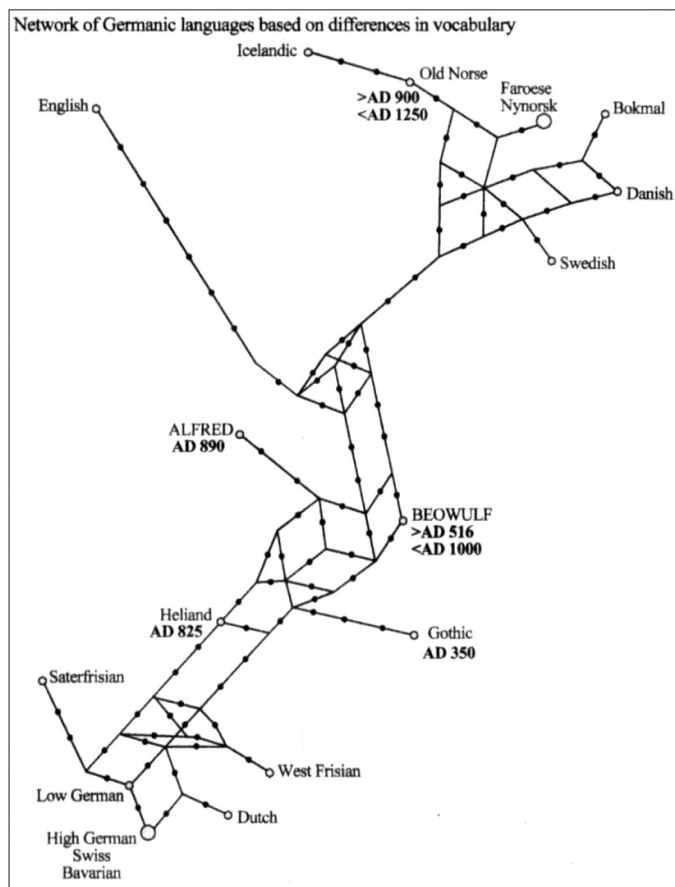


図1 語彙における相違に基づくゲルマン諸語のネットワーク (Oppenheimer 2007 : 342, Figure 8.1 b) ¹⁵⁾

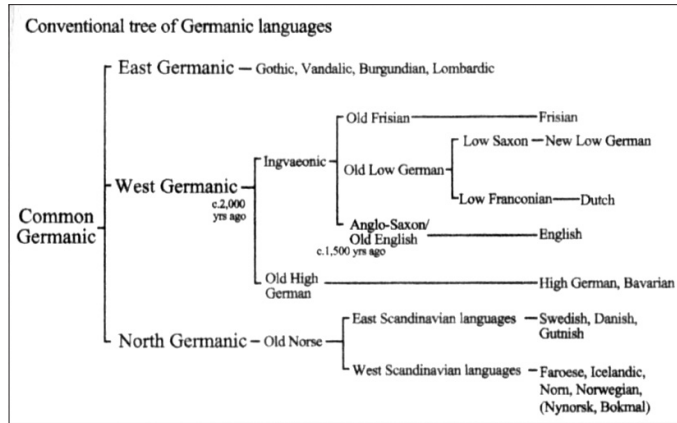


図2 慣用的なゲルマン諸語の系統樹 (Oppenheimer 2007 : 341, Figure 8.1 a)

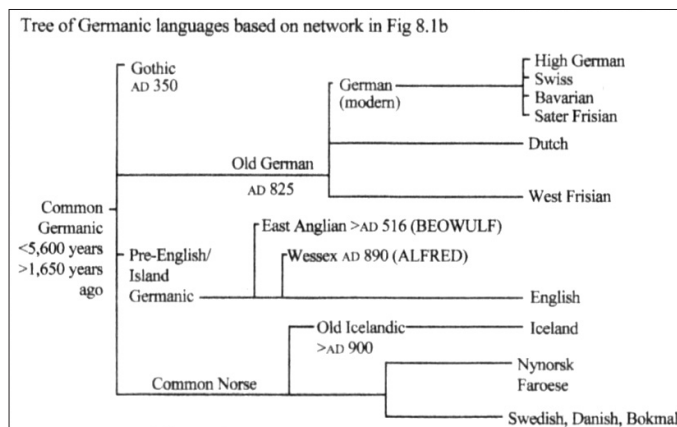


図3 語彙ネットワークに基づくゲルマン諸語の系統樹 (Oppenheimer 2007 : 343, Figure 8.1 b)

4. 結語

『古英語版七書』のウェセックス方言で書かれたカドモンの聖歌とそれ以前にノーサンブリア方言で書かれたものを古英語の発達の上で定位して、デー法以後、テムズ側の東側、イングランド中部・北部においてアングロ・サクソン語がスカンディナヴィアの古ノルド語と融合していく過程がより明確になるとと思われる。今回詳しく取り上げることができなかったルーン文字の普及の過程も合わせて、古英語の発達過程について

今後も研究を進めたい。

注

- 1) この写本の詳細については、Ker (1957 : 38-9) を参照されたい。現在では、この写本はケンブリッジ大学図書館のwebサイトで閲覧することができる。
- 2) Oppenheimer (2007) とそこに引用されている多岐にわたる考古学・人類学的研究文献を参照されたい。
- 3) 現代英語でも、異教の神々の名が火曜日～土曜日、すなわち、Tuesday, Wednesday, Thursday, Friday, Saturday に残っている。(寺澤 (編) (1997)などを参照)。

- 4) 名詞の格変化の単純化、複数形から複数語尾への変化などは、古ノルド語との言語接触のために起きたと考えられている。これらが近代英語の発達の原因となった。
- 6) アルフレッドは、『牧者の慰め』(*Pastoral Care*)の序文で、翻訳事業を行った理由を述べている。一つの理由として、荒廃したイングランドにおけるラテン語の衰退をあげている。
- 7) アルフレッド・サークルによる散文はウェセックス方言であるが、後期ウェセックス方言は、ノルマン・コンクエストまで共通語であった。(小野・中尾1980: 172-3)
- 8) ウェセックス版の写本は、オックスフォード大学ボドリアン図書館蔵 Tanner 10 (Bk. 4) である。
- 9) 翻字に際しては、Marsden (2004: 80) を参照した。写本に基づいて、以下のように Marsden を修正した。3行目、uuldurfadur → uuuldurfadur、8行目、tiadæ → tiadae
- 10) Marsden 2008: 80, footnoteを参照。なお、*uard* に割れが起きていないことも同様である。
- 11) ウェセックス版では、*bearnum*。この現象の詳細については、中尾 1980: 253-256, 2.1.2.4.1.2.1.1.1 を参照。
- 12) 中尾 (1985:354) によれば、この [v] は Gmc [β] (voiced bilabial fricative) を引き継ぎEOEの初めはで表されていたが8世紀半ばごろまでにはβ>v (f) となった。
- 13) Smith (2008: 136) を参照。
- 14) Smith (2008: 136) によれば、<ē>は西ゲルマン語 (West Germanic) の<â>に対する、アングル方言の反映である。しかし、OEDによれば、語源に関して、ゴート語 (Goth) の両形 (swā, swē) をあげているが、両者の関係や詳しい語源は未詳としている。
- 15) 図 1 は、Forster, P., Polzin, T. and Röhl, A. (2006) 中の図 Figure 11.3 を簡略化したものである。

引用参考文献

- Forster, P., Polzin, T. and Röhl, A. (2006) . 'Evolution of English basic vocabulary within the network of Germanic languages', in Peter Forster and Collin Renfrew (eds.) . *Phylogenetic Method and the Prehistory of languages*. McDonald Institute of Monograph Series. Cambridge : McDolald Institute for Archaeological Research, pp.131-7.
- Ker, N. R. (1957) . *Catalogue of Manuscripts Containing*

- Anglo-Saxon*. Oxford : Clarendon Press.
- Marsden, R. (2004) . *The Cambridge Old English Reader*. New York : Cambridge University Press.
- 中尾俊夫 (1985) 『音韻史』. 英語学大系第11巻. 大修館書店.
- Oppenheimer, S. (2007) . *The Origins of the British*. Robinson.
- Smith, J. (2008) . *Old English : A Linguistic Introduction*. New York : Cambridge University Press.
- 高橋博 (訳) 『ベータ英国民教会史』. 講談社学術文庫1862. 株式会社講談社.
- 寺澤芳雄 (編) (1997) 『英語語源辞典』. 研究社.

辞書

- Oxford English Dictionary Second Edition on CD-ROM* (v. 4.0)

(こばやし・しげゆき 聖学院大学人文学部日本文化学科教授)